ISSN 0910-4178

學而（がくじ）

摂南大学図書館報

No. 52
1998.1

学而時習之、不亦説乎。（「論語」より）
ー学びて時にこれを習う、亦（また）説（よろこ）ばしからずやー

＊題字は王羲之の書による

大石亀次郎先生のことー私の「学而」ー

薬学部教授　熊懐（くまだき）　稜丸（いつまろ）

高校に愛称『カメサン』で親しまれた大石亀次郎という漢文の先生がおられた。先生は若い頃夜間中学の教師をしながら苦学の末、大学を卒業され、旧制中学の教師、高等女学校の校長や町長などを歴任された方で、ピンと八の字髭を伸ばし山高帽で通勤された。バスでは大音声で「座っている諸君は立っている人の鞄を持ちなさい。奥に詰めて」などとやられる。座ったら膝の上は鞄の山になるが、お蔭でバスに乗れないで遅刻することもなかった。因みに先生はいつも立っておられた。

先生は大変絵がお上手で、三国志の講義のときなどは両手にチョークを持ち、左手で馬、右手で馬上の武者を同時に画いていくなどという特技を披露された。特に論語の話になると熱が入り、いろいろな実生活の具体例を挙げて分かり易く解説して下さった。本館報『学而』の由来とは違うが、その中の一つに「学而不思則罔　思而不学則殆」[注]がある。先生の解説によると「本を読んで勉強しても、しっかりその意味を考えないと真の知識とはいえないし、いろいろ考えても本を読んだり他人の考えを聞いたりして勉強しないと一人よがりでとんでもない失敗をする」ということである。教育研究でもいろいろな本を読み知識を得て、自分なりに考え噛み砕いて講義をしなければいけないし、広く文献を読み、思索を巡らして研究に取り組まなければならぬのだと肝に銘じている。学生諸君も丸暗記ばかりせず、「よく学び、よく考えて」もらいたい。

1991年9月外国出張から帰ったら台風で成田で足止め、ふとテレビに目をやると、大石先生ご夫妻が一緒に風呂に入っておられる画面が飛び込んできた。敬老の日の特別番組で、百歳以上のカップルを紹介していたのである。旅の疲れも吹っ飛んだ。このことでお手紙を差し上げたところ大変喜んでおられたそうである。先生に年賀状を差し上げると必ず葉書一杯に「寿」と大書され、亀次郎百二歳百代（ももよ）百歳などと付記した御返事を頂いた。

この古風な愛妻家先生も今はない。合掌

注：学んで思わざればすなわち罔（くら）く、思って学ばざればすなわち殆（あやふ）し

～ 目　次 ～

大石亀次郎先生のことー私の「学而」ー（熊懐稜丸）・・・　1
「フマーニオール・コーナー」のすすめ（2）・・・・・・2，3
（久保勝司・山田澄・村田俊明・角田勝・益川徹）
資料紹介「国政のウラオモテ・国会30年の藤田進」・・・　4
日本支配下のインドネシアにおける記録映画（門間貴志）・　5
平成9年度大学図書館職員講習会に参加して
（廣森しのぶ）・・・　6
軽雑誌人気ベスト3・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6
特色ある新着資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7
図書館員が薦める1冊「ありがとう、ジョーイ・モーゼス」・・　7
インターネットで情報探索・・・・・・・・・・・・・・　8
前期休日開館結果と後期の日程・・・・・・・・・・・・　8
図書館からのお願い・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8

「フマーニオール・コーナー」のすすめ(2)

「フマーニオール・コーナー」は、より豊かで温かい人間性をもつ若人がこの学窓から巣立っていくことを願って設けられたものです。

同コーナーの図書の選書は、各学部の先生方にお願いしました。そこで、選書にあたられた先生に、どのような観点から選ばれたのか、それらを読むことによって学生諸君に何を読み取ってほしいかを語っていただきました。

宇宙・神・人間

工学部教授　久保（くぼ）　勝司（かつし）

読書は友達とのつき合いに似ている。若い時は、色々な人（本）とたくさん出会う（読書する）方がいいと思う。私はさほど愛読者ではないが、一度読んだ本を読み直すことが、ときどきある。どのような気持ちのときに、再読する気になるかは覚えていないが、読み直したときに、新たなことを感じた覚えは何度かある。友達とのつき合いでも、似たような経験があるように。

私は「宇宙からの帰還」を、最初、壮大な科学冒険ドキュメントと思って読み始めたが、実は、「宇宙とは、神とは、人間とは」を自問する宇宙飛行士たちの精神ドラマである。思いがけなく、良い人達に出会った感じである。

宇宙飛行士たちが、暗黒の宇宙から青色をして美しく輝く小さな地球を眺め、その神秘さに感動しながら、彼らは「その時、何を感じとり、何を考えたのか、宇宙体験は彼らの意識、また、その後の生き方をどう変えたのか」未知との遭遇によって生まれた内的変化を、立花隆がインタビューによって鮮やかに描きだしている。ここには、人間の想像力をはるかに越えた、実体験した人のみが語りうるものがある。まずは、一読を。

＜推薦図書＞

① 孔子　井上靖著
② 宇宙からの帰還　立花隆著
③ 一日一生　松原泰道著
④ 人生、無理せずラクに生きなさい　藤原東演著
⑤ 庭仕事の愉しみ　H．ヘッセ著

人生と死を考える

工学部教授　山田（やまだ）　澄（すます）

鷲田清一著の「じぶん・この不思議な存在」は、がむしゃらに会社のために働いてきた人がふと「じぶんの人生って何だったのか」と思う「じぶん」と言う問題を、難しい哲学的立場や精神分析の問題として議論するのではなく、色々な座標軸から身近な例を挙げて平易な口調で議論しており、どちらかといえば難解になりがちなこの種の問題を気楽に考える糸口を与えてくれる大変読み易い新書です。一方、小松美彦著「死は共鳴する」は、死のあり方と医学・医療の在り方への批判をとおして、最近話題になっている脳死と臓器移植の問題を科学史研究家の立場から多くの資料や論文を基に考察したもので、臓器移植法が通過した今、我々が一度はじっくりと考えてみなくてはならない問題に何らかの手がかりを与えてくれるものと思います。

＜推薦図書＞

① ＜こども＞のための哲学　永井均著
② じぶん・この不思議な存在　鷲田清一著
③ 死は共鳴する　小松美彦著

どう生きるかの指針となり感動をあたえる作品

国際言語文化学部教授　村田（むらた）　俊明（としあき）

推薦作品に一貫するテーマは何かを一言であらわすのはむずかしいことですが、それらは、人間愛、教育愛、良識と勇気、創意と工夫、苦悩と宿命、希望など人間的な価値をテーマにしています。わたしたちは、皆、どう生きたいかについて思いを抱いています。どう生きるのがベストかを問いながら生きています。とくに青年期には、だれもが自己についての自信や達成感・充実感を得たいと望み、責任を引き受け、自己があることの意味を実感したいと強く望んでいます。そんな時、ブレヒトの描くガリレイの人間らしさや理性を信ずる姿や山田吉彦の、貧困な境遇の中で努力するファーブルの人となりには、心をうつものがあります。また池田潔の「自由と規律」も、責任と義務、ノブレス・オブリージ、正直であること、是非を的確にする勇気をもつこと、弱者を虐めないこと、他の自由を侵さないことなど、当たり前のことではあるけれども、大切な指針をあたえてくれます。

＜推薦図書＞

ガリレイの生涯（ブレヒト）/自由と規律（池田潔）/隠者の夕暮れ（ベスタロッチ）/エミール（ルソー）/ファーブル記（山田吉彦）/宇宙からの帰還（立花隆）/犠牲（柳田邦男）/賢治の学校（鳥山敏子）/雪（中谷宇一郎）/小さな博物館（河合雅雄）/ロウソクの科学（ファーラデー）

“親”という言葉の重み

経営情報学部教授　角田（すみた）　勝（まさる）

“親”という言葉の重さが問われる昨今、何を原点に置くか、各人が認識する必要に迫られている。平常な時に理解し得ることでも、自分が直接関わらなければならないときには、普段の自分の信念を棚に上げ、悩み、苦しむ場合が多い。私が推薦したこの2冊の本は、われわれが考えて行くためのヒントを与えてくれるように思う。

突然、障害児の親となった主人公達が戸惑い、拒否し、逃避へと走りながら、少しずつ軌道修正していく姿がえがかれている。悩みながら、時には「死んでほしい」と願ったりしながらも、“親”として生きていく様は読者に親近感さえも抱かせる。そして、家族とは苦悩を共有しながらも、生きていく力を共感できるものであるということが感じられる。

また家族という枠を超えて、この本（恢復する家族）から、人が生きていく上での心のあり方、考え方、悩む大切さを感じ取ってくれれば、一層読む価値も増すことと思う。

＜推薦図書＞

① 生命（いのち）かがやく日のために　斉藤茂男著
② 恢復する家族　大江健三郎著

人の生き方

薬学部教授　益川（ますかわ）　徹（とおる）

多くの本に接し、そこから多くのものを吸収できるのは、感性豊かな学生時代の今と思います。ここにあげた作品は特異な社会事情や死に直面といった状況の相違はあるが、“人はいかにして自分の人生を全うするか”を問いかけている。

「落日燃ゆ」は政治家広田弘毅の生涯を描いたもので、古武士としての気概を彷彿させる。政治家としてではなく、むしろ人として人生を完結させている姿に心を引かれる。

「いのち」は終末期医療の中で人の生き方、死に方を医師との対話を通して描いている。極限状況のもとで、人は自分の人生との真摯な対話を通し生きることの再発見をする。

常日ごろから“生き方”について様々な角度からもう少し考えてみたいものである。本コーナーの多くの本に接し、心豊かな人間性を育ててほしい。

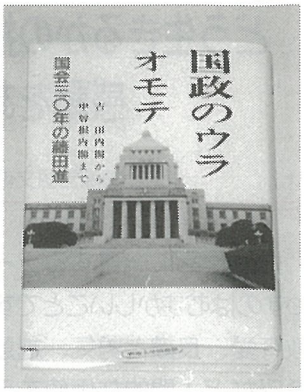
＜推薦図書＞

① 落日燃ゆ　城山三郎著
② いのち　柳田邦男著

資料紹介

『国政のウラオモテ・国会30年の藤田進』

ー藤田文庫を収斂する一冊ー



国政のウラオモテ・国会30年の藤田進刊行
委員会編・発行　1997年刊　(289.1　F)

本学図書館には本学園総長・理事長藤田進先生から寄贈を受けた「藤田文庫」があります。これは本書にも記されているように先生が国会で30年にわたり参議院議員として国政に携わってこられた間に収集活用された貴重なコレクションです（本館・参考図書室に設置）。寄贈されたのが1983年ですから、すでに14年になります。当時同コレクションの目録作成を担当させていただいた者としては、今回の標記図書の刊行にはひとしおの感慨を覚えるものです。といいますのは同文庫には、先生が経済学博士の学位をとられた著書『基幹産業社会の動向』をはじめ、『経済政策と格差問題』『日本経済の展望と福祉』などがありますが、政治、経済を主に法律、労働、広島関係、人権問題、そして語学、芸術にまでおよぶ約2,200冊のコレクションをまとめる何かが欠けていたように思われていたからです。そこへ「国会30年の藤田進」の副題を持つ図書が刊行されたのです。これでこのコレクションを収斂するものができたと思われました。言わば、これは画竜点睛の１冊と言うことができます。

さて本書の内容は、総長・理事長藤田進先生の生い立ちから今日に至るまでの道程をまとめたものです。それはとりもなおさず1910年代から今日までの日本の歩んできた道でもあります。と同時に一平和主義者の行動の軌跡を描いたものともいえるでしょう。書名を見ますと国政に重きが置かれているように思われますが、参議院議員時代の記述のほか、生い立ちから労働運動の時代、そして学園総長理事長の時代についても多くの紙面が割かれています。つまり先生の全体像がかたよりなく理解できるような構成になっているのです。

通読してわかることは、一貫して流れているものが平和思想であるということです。その平和思想は先生の出身地広島と関連付けて考えられますが、決してそれだけではないことが本書から読み取れます。すなわち、先生は海軍式の広島県立商船学校をやめて本学園の前身校である関西工学校土木科に入られますが、これは象徴的な出来事のように思われます。なぜなら土木工学とは英語ではcivil engineeringであり、これはmilitary engineeringと対立する概念を持っています。つまり土木工学は軍事工学に対して一般市民のための工学（平和工学）の意味を持っているのです。もちろん先生が原爆投下直後の広島の惨状を目の当たりにしたことは、先生の平和主義を一層強固なものにしたであろうことは推察されます。その後の先生は非武装中立を標榜とする社会党に入られて活躍されることになりますが、それはごく自然な成り行きのように思われます。

先生はことあるごとに「平和」を口にされています。たとえば本書では、電産中央執行委員長のとき（昭和27年）の中国新聞への寄稿『八月六日に寄す－繰り返すべからず』をはじめとして、総評議長のころ、参議院議員のころ、そして学園理事長就任の所信においても「日本国憲法の平和主義、民主主義に基本をおき」（「大阪工業大学学報」昭和44年）とあります。

また、本書には少年時代の腕白ぶりや、学生生徒の頃から歌が得意であったこと、そして仕事の関係でご母堂の葬式に出られなかった心残りなど、先生の人柄を忍ばせるエピソードが随所に紹介されています。

ぜひ多くの皆さんに読んでいただき、本学園の最高指導者、総長・理事長の考え方や人となりに触れていただきたく思います。

（図書課長　勘川捷治郎）

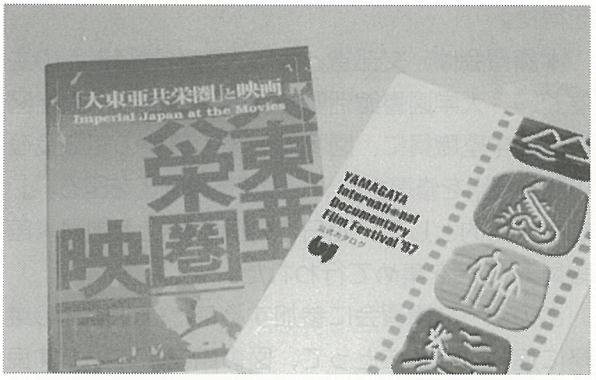
日本支配下のインドネシアにおける記録映画

山形国際ドキュメンタリー映画祭東京事務局　門間（もんま）　貴志（たかし）

昨年（1997年）10月6日～13日の日程で山形国際ドキュメンタリー映画祭'97が開催されましたが、この映画祭への出品作品の一つ『日本軍政下のインドネシア映画』の製作に際し、本館所蔵のビデオテープ『日本軍政下のインドネシアにおいて上映された映画』が役立てられました。そこで同映画祭東京事務局の門間貴志さんに映画祭の様子や出品作品についてご紹介いただきました。

山形国際ドキュメンタリー映画祭というのは、1989年から隔年で開催される映画祭である。ドキュメンタリーというと一般の人にはなかなか馴染みがなく、テレビ報道番組のようなイメージを持たれるかも知れないが、なかなかどうして自由な表現が試みられた、実にエキサイティングなジャンルなのである。今年の映画祭は、サブ・イベントとして〈「大東亜共栄圏」と映画〉という企画が立てられた。ちょっとキナ臭い響きがする言葉に思われるだろうが、要するにこの時代に日本側とアジアで製作された映像を比較上映できたら面白いだろうというのが、そもそもの発想である。昨年から韓国、台湾、香港、中国へ飛び、当時の映像を探しまわったが、なかなか骨の折れる作業であった。

戦時中、ほぼアジア全域の映画は大なり小なり日本の影響を受けた。製作が完全にストップしてしまった国も多い。中国や香港では抗日映画が製作され、植民地だった台湾と朝鮮は日本映画の枠組みに組み入れられた。東南アジアでの映画製作・配給業務は直接にせよ間接的にせよ日本軍の支配下に入った。国策会社の日本映画はフィリピンやマレーシア、シンガポールなど、東南アジア一帯に支社をおき、多くのニュース映画を製作した。それらの多くは現地の人に見せるために作られたのである。つまり〈大東亜共栄圏〉の思想を説くための手段でもあったのだ。日本軍政下のインドネシアで日本映画社が製作したニュース映画は、日本国内にもインドネシアにも残っていない。戦後オランダ軍が接収してしまったためである。現在はオランダのフィルム・アーカイブに保管されている。その一部のビデオ・コピーが摂南大学の図書館に収蔵されていることを知り、渡りに船とばかり97年の夏に閲覧させてもらった次第である。結構な分量だったので三日ほど通うことになった。オランダ側から入手した資料と照らし合わせながら、「南方報道」や「ジャワ・ニュース」など、当時の様子を伝えるニューズリールを初めて目にすることになった。防衛義勇軍への志願を呼びかけるもの、ロームシャの募集についてのもの、東条首相ジャワ訪問を報じるもの、隣組の意義や貯蓄奨励など、民衆を啓蒙するためのものなど…。そして最後の「南方報道」はインドネシア独立準備委員会設立を日本が認めるニュース。しかしその数日後に訪れた戦後のため上映されることはなかったという。非常に興味深かったのは、そのほとんどがインドネシア語であるということである。オランダ側でこのフィルムの内容研究があまり進んでいないのは、実は言葉の問題が一番大きい。しかし日本軍のインドネシア支配を研究する上では一級資料であることは間違いない。実際に山形映画祭で上映したのは、摂南大学での閲覧の結果、私が内容や時代区分で選んで一時間半ほどの三番組に編成したものを、オランダ側で改めて業務用のビデオにおこしてもらったのである。会場では日本語と英語の同時通訳が聞けるようにした。この番組は〈「大東亜共栄圏」と映画〉のプログラムの中では非常に好評を博した。インドネシアから参加したある女性監督は通いづめでこの番組を観ていた。期間中に行われたシンポジウムでも、植民地の支配者が何を撮り何を見せようとしたのかを考える上で、恰好のサンプルとして俎上に乗せられた。実に貴重な資料である。



＜講習会参加記＞

平成9年度大学図書館職員講習会に参加して

枚方分館　廣森しのぶ

昨年11月11日～14日の4日間、大阪大学で開催された大学図書館職員講習会に参加する機会を得た。

本講習会は、文部省と大阪大学附属図書館の主催で、「大学図書館活動を促進するため、大学図書館の中堅職員に、図書館業務の最新の知識及び専門的技術を修得させ、その資質の向上を図る。」ことを目的として、西日本の国公私立大学図書館職員100名を集めて行われた。

このような講習会に参加することは、日常の業務に追われる私にとって、図書館業務を見直す良い機会であり、また、大勢の大学図書館職員と接することで、何か良い刺激が得られるのではないかと思い、期待をいだいて会場へ向かった。

講習会は、講義、共同討議等に分かれて行われた。

講義は、電子図書館、著作権、図書資料の保存対策、生涯学習などの、現在大学図書館を取り巻いているさまざまな問題や課題をテーマとして進められていった。また、共同討議では、各図書館職員の図書館に対する熱意が感じられる討議となった。

私が、この講習会の参加にあたり視点を置いたのは、社会や大学が発展していくなかで、大学図書館はどのように変化していくべきか、また、利用者のニーズに図書館員はどのように対応していくべきかということにあった。

現在の高度情報化社会において、大学図書館を取り巻く環境は大きく変化している。いまや、本学図書館においても、ネットワークに対応した新図書館システムの早期導入が望まれる。CD-ROMなどの電子媒体も増え、学内LANやインターネット環境も整備され、即座に欲しい情報をキャッチすることが可能になった。求める情報が素早く得られることは、研究者や学生にとって素晴らしいことである。しかし、本のページをパラパラとめくり、自分の手で情報を探していくことで、“ひらめき”という予期せぬ考えが生まれることも見過ごすことはできない。

時代が進んでいき、便利になっていく世の中で、利用者が本当に求めているものは何か、ということを常に把握しておかねばならない。そうした利用者のニーズに対応しながら、時には機械に頼らない、人と人との暖かみのある図書館について後ろを振りかえってみることも大事だと感じた。

最後になるが、講義で述べられた中に「大学を人間の体に例えると、図書館は心臓である。」という言葉があった。すでによく言われている言葉であるが、常に血液が体中を流れるように、図書館は常に新鮮な情報を提供しなければならない。流れが止まってしまうと、大学自体も機能を失ってしまう。

この、無くてはならない心臓＝大学図書館に課せられた使命を認識し、より良い大学図書館職員をめざして、今後の業務に取り組んでいきたい。

軽雑誌人気ベスト3

＜本　館＞	＜分　館＞
① OH！PC！	① POPEYE
② Kansai Walker	② ロードショー
③ インターネットアスキー	③ OH！PC！
	③ るるぶ

（97年4月から97年12月までの貸出記録による）

～特色ある新着資料～

【本　館】

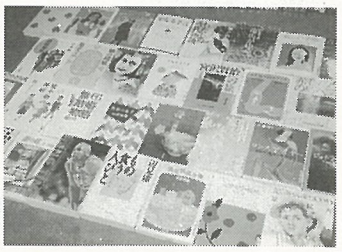
本学元教授高田卓爾先生寄贈図書

このたび、本学元教授高田卓爾先生から、刑法・刑事訴訟法及び刑事学関係の文献のご寄贈をうけた。日本語文献178点、外国語文献（独・仏・英・米）109点であり、現在入手しがたい貴重な文献が数多く含まれている。本学図書館では、高田卓爾先生のご寄贈本であることを明記するが、学生諸君を含め広く利用されることこそ、先生のご厚志を生かせることになると考え、６階の普通図書館に配架することとした（近日配架予定）。

高田卓爾先生は、大阪市立大学及び大阪大学それぞれの名誉教授であるが、摂南大学法学部の設立にその準備委員として尽力され、1988年法学部設置が認可されるや、初代法学部長として粉骨砕身、学部運営にあたられ法学部発展の礎を築かれた（1994年定年でご退職）。先生には、かつて刑事訴訟法学の分野で、東大の平野竜一教授の著書と、声価を二分した名著『刑事訴訟法』（青林書院刊）がある。

【分　館】

文庫300冊



このたび、分館では現在ある文庫に加え、新たに300冊の文庫を購入しました。

「人間失格（太宰治）」や「銀河鉄道の夜（宮沢賢治）」などの名作から、「もの食う人びと（辺見庸）」や「マイケル・ジョーダン物語（ボブ・グリーン）」などの最近の作品まで揃っています。

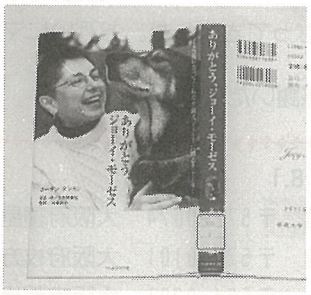
みなさんも、時間をつくって、“こころの旅”に出てみませんか？

図書館員が薦める１冊

「ありがとう、ジョーイ・モーゼス」

スーザン・ダンカン著・古武家勝宏訳
ペットライフ社（936　D）

著者は看護婦として働いている時に、多発性硬化症という神経の難病に罹ってしまいました。この病気の症状は外見上は分かりにくいため、それまでやってきた簡単な仕事にも道具が必要となった著者に対して、冷やかな目で見る人もいました。著者自身、周囲の人に助けを求めることは精神的に大きな苦痛で、人の助けなしに日常生活が送れるように、介助犬を求めました。しかし，介助犬養成所から訓練済みの犬を手にいれるためには、10年近く待たねばなりません。そこで著者は独自に介助犬を養成することを決意しました。



ジョーイは心がやさしく、体がとても大きくて、腕白で、好奇心の大変旺盛な犬です。しかし著者にその能力を発見されるのがあと１カ月遅れていたら引き取り手がなく、収容所で処分されていたかも知れません。著者とジョーイは、お互いに必要な相手に出会えて、人生を豊かにすることができ、生き方を確立することができたのです。

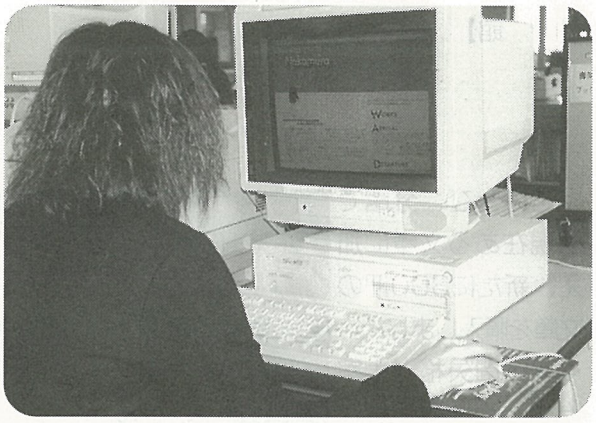
犬が人の体や心の一部になれること、人と犬が何ものにも変え難い絆で結ばれうるということ、そしてまた、より多くの介助犬が必要であるということが理解できる一冊です。

（奉仕係　M.M.）

インターネットで情報探索

本学図書館（本学図書館のみ・分館未定）でもインターネットによる情報探索が可能になりました。

端末機の設置場所は5階参考図書室のカウンター横です。学習研究に必要な情報を追って世界を旅してください。



NACSIS-Webcatを使おう

（URL：http：//webcat.nacsis.ac.jp/）

このインターネットでとくに利用をお勧めしたいのが、Webcatというデータベースです。これは、学術情報センターが提供するNACSIS-CAT＝総合目録データベースをインターネット上に公開したもので、図書や雑誌の目録が誰にでも簡単に検索できます。このデータベースのデータは全国の大学・研究機関など500以上の機関が共同で作成しており、求める資料がどの機関に所蔵されているかもわかるようになっています。

利用の詳細は、ホームページの「利用の手引き」を参照してください。カウンター担当者に尋ねていただいてももちろん結構です。

〈前期休日開館結果と後期の日程〉

図書館では、皆さんのご要望に応え、前期期末試験期における休日開館を試行しました。結果は次のとおりです。

	実施日	入館者数（人）
本館	8月30日(土)	261
	8月31日(日)	161
	9月 7日(日)	550
	計	972
分館	9月 7日(日)	602
	9月14日(日)	37
	9月28日(日)	117
	計	756

＜後期の日程＞

1/15（祝）・1/18（日）（分館のみ）・1/25（日）

開館時間はいずれも10：00～16：20

図書館からのお願い

試験期を控え、利用者の多くなる時期になりました。利用者全員が快適に図書館を利用できるよう次の点について協力をお願いします。

1. 静かに学習してください。
2. 図書館資料を大切に扱ってください。
3. 貴重品は必ず身につけてください。

編集後記

・エルニーニョ現象で、今年は暖冬と言われています。しかし、冬はこれからが本番。風邪などをひかないようにしてください。

・試験期を迎え、さすがに利用者が多くなってきました。お互いにマナーを守って、図書館を有効に利用してください。

・今号にご協力いただいた皆様に心から感謝いたします。　（S．T）

摂南大学図書館報「学而」No.52　1998.1

編集・発行　摂南大学図書館　本　館　〒572-0074　大阪府寝屋川市池田中町17-8　TEL.(0720)39-9112

枚方分館　〒573-0101　大阪府枚方市長尾峠町45-1　TEL.(0720)66-3102

印刷　㈱ミトヨ　〒534-0001　大阪市都島区大東町2-13-10　TEL.(06) 922-1178